

令和2年度 地球環境基金プロジェクト

北陸におけるSDGs達成に向けたESDプログラム開発

モデル事業報告書

令和3年3月

石川県ユネスコ協会

はじめに

～「北陸におけるSDGs達成に向けたESDプログラム開発」～

2020年は、コロナ禍により世界は新たな課題に直面し、現在なお沈静化に向けて試行錯誤が続いています。これまで「あたりまえ」「常識」と考えていたことが出来なくなり、正解のない世の中へ一気に加速することとなりました。この状況に対して、私たちは迷いながらも力を合わせ、立ち向かいつつありますが、まだその力は十分であるとは言えません。

丁度2020年4月から、小学校では新学習指導要領が全面施行されています。その教科書では、2015年に国連で採択された世界の目標である「持続可能な開発目標（SDGs）」やそのための人づくりを担う「持続可能な開発のための教育（ESD）」について記載されています。しかしながら、SDGsに関する理解、SDGsとESDの関係等については、必ずしも多くの学校の先生方が熟知している状況にはありません。また、コロナ禍のため学校及びESDの推進する関係者は孤立しがちになっています。

石川県ユネスコ協会は、大学コンソーシアム石川がこれまで実施してきた地球環境基金助成事業を引継ぎ、平成31（令和元）年度より「北陸におけるSDGs達成に向けたESDプログラム開発」事業を実施しています。これまで北陸ESD推進コンソーシアムとの連携の下、環境省及び文科省が推進するESD推進ネットワークの地域ESD推進拠点として、SDGsの達成に向けたESD活動に取り組んできたことをさらに一歩進めたわけです。

コロナ禍以降の正解のない世界の課題を解決せねばならない子どもたちの教育として、このSDGs達成に向けたESD教育がその打破の重要な役割を担っています。

この「北陸におけるSDGs達成に向けたESDプログラム開発」事業の目的は、北陸（特に学校）においてSDGs達成に貢献するESDが着実に実施されることと、北陸のSDGs・ESD実践団体が情報、経験を共有するプラットフォームが形成・機能されることです。

そのため、次の4つのことを行っています。

- ① 北陸版SDGsガイドブックを作成し、SDGs・ESD教育を開発普及しています。
- ② モデル校を選定しSDGs達成に向けたESDプログラムを開発し普及の研修を行っています。
- ③ SDGs・ESD普及セミナーを開催しています。
- ④ 北陸におけるSDGs・ESD推進のためのプラットフォーム構築のために連絡協議会を設置・開催しています。

この報告書では、今年度実施した以下の3件のモデルプロジェクトの成果を取りまとめています。

- ・富山市立堀川小学校におけるモデルプロジェクト
- ・金沢市立花園小学校におけるモデルプロジェクト
- ・勝山市のモデルプロジェクト

本報告書が今後の北陸をはじめとする我が国におけるSDGs達成に向けたESD教育の推進に資することを願うものです。

令和3年3月
石川県ユネスコ協会 理事
今井和愛

目 次

はじめに

目次

○令和2年度 地球環境基金助成事業 活動概要報告	1
ー 北陸におけるSDGs達成に向けたESDプログラム開発 ー	
○富山県富山市立堀川小学校のモデルプロジェクト	3
主体的に社会的事象の意味を考え、社会認識を深めていく子ども	
ー 第4学年 社会科・総合的な学習の時間 「富山型デイサービス」の実践からー	
(富山市立堀川小学校 教諭 宮前壯章)	
○石川県金沢市立花園小学校のモデルプロジェクト	13
「きまっし！花園！」を実践して	
(金沢市立花園小学校 教頭 坪内真弓)	
○福井県勝山市のモデルプロジェクト	17
勝山市のESD	
ージオパークを舞台としたESDの取組についてー	
(勝山市教育委員会 教育総務課 指導主事 安居幸恵)	

令和2年度 地球環境基金助成事業の活動(概要)報告

ー 北陸におけるSDGs達成に向けたESDプログラム開発 ー

令和3年3月

1. プロジェクトの概要と結果

(1)SDGs・ESD 推進検討委員会の設置

事業プロジェクトチーム内に北陸 ESD 推進コンソーシアムのコアメンバーを中心とした検討委員会を設置し、オンラインで SDGs・ESD 推進検討のための会合を開催した。この結果、毎回各県の推進状況が確認でき、情報を共有し3県ごとに担当チームで支援できるようになった。

- 5月19日(12名) オンライン(会合の全てはオンライン)〔今年度事業の概要・課題、事務局体制等〕
- 6月12日(12名) 〔年間計画、北陸のSDGs達成のためのESD教育推進のための課題等〕
- 7月26日(10名) 〔北陸版SDGs・ESD実践ガイドブックの活用、SDGs・ESD促進の状況等〕
- 10月15日(12名) 〔勝山市と福井大学が連携した研修会、北陸ユネスコスクール交流会の開催等〕
- 11月25日(12名) 〔勝山市での研修会報告、北陸ユネスコスクール交流会の開催内容等〕
- 12月21日(12名) 〔交流会の総括、今年度の北陸ESD推進コンソーシアムの事業の総括等〕
- 1月21日(12名) 〔北陸ESD推進コンソーシアムの事業報告書の内容等〕
- 2月16日(12名) 〔来年度事業の企画案等〕

(2)北陸版 SDGs ガイドの開発・普及

北陸(石川県、富山県、福井県)ではSDGsについて十分に理解できていない人が多いため、まずSDGsとは何か、北陸ではどのような取り組みを進めるべきかを示す学校教員、社会教育関係者向けの北陸版SDGsガイドを開発、普及することとした。北陸版SDGsガイドの開発はプロジェクトチームの検討委員会が実施した。併せて、SDGs・ESD活動を実施しているステークホルダーの連携を作り、SDGs・ESD活動の推進を図る地域ユネスコ活動の広報・普及も図ることとした。

令和元年度に『北陸版SDGs・ESD実践ガイドブック』を開発・作成し、本年度は増刷し、北陸のユネスコスクール、民間ユネスコ協会、教育委員会等のSDGs・ESD推進ステークホルダーに配布した。また、改訂版の作成準備・フィードバックのために、アンケート調査を行い、さらにSDGs学習会を金沢で開催した(11/29)。

併せて、北陸の学校等でガイドブックを活用したSDGs・ESD研修を実施した。(勝山市立の小中学校、富山県教育委員会・富山県立堀川小学校・楡原小学校、金沢市教育委員会などで)

(3)SDGs達成に向けたESDプログラムの開発・普及

学校においてSDGsを念頭に置いたESDプログラムを実施できるよう、学校現場と連携し、モデル校においてSDGs・ESDプログラムを開発、実践する。

本年度は、富山県立堀川小学校、金沢市立花園小学校、勝山市地域の小学校・中学校でモデル授業を実施し、プログラム開発を行った。

(4)SDGs・ESD普及セミナー

SDGsに関する啓発・普及するため、SDGs・ESDプログラムの開発実施状況の報告を行う。

本年度は、次のセミナーを行った。

- 石川：12月 13日北陸ユネスコスクール交流会（WEB） 出席者：27名
（内容のメインの実践事例発表）
 - ① 金沢市立兼六小学校 田中 哲也 教諭
「地域の SD の課題を軸に SDGs・ESD の価値に迫る！」
 - ② 富山市立堀川小学校 宮前 壯章 教諭
「主体的に社会的事象の意味を考え、社会認識を深めていく子ども
～社会科・総合的な学習の時間「富山型デイサービス」の実践から～」
 - ③ 富山大学人間発達科学部附属小学校 鼎 裕憲 教諭
「SDGsを意識したプログラミング学習の実践～富山市の未来の公
共交通を考えよう～」
 - ④ 福井県勝山市教育委員会 教育総務課 安居 幸恵 指導主事
「勝山市の ESD」
- 福井：11月 19日勝山市立勝山南部中学校（対面公開研修会）
- 富山：2月 19日に教員向け研修会（ESD講座委員会 WEB）

(5) 北陸における SDGs・ESD 推進のためのプラットフォーム構築

SDGs・ESD に関する活動を共有し、協働活動を促進するため、北陸 3 県の主要な関係者からなる協議会を設置・開催する。それにより SDGs・ESD 活動を実施しているステークホルダーの連携を強化し、地域ユネスコ活動のより広範な広報・普及を図る。昨年度はプラットフォーム会議会議として北陸 SDGs・ESD 推進連絡協議会を12月に1回しかできなかった。

本年度は、9月末に大学・行政・NPO・民間ユネスコ協会等の主要な SDGs・ESD 推進関係者29名を委員に委嘱し、協議会を設置し、2回開催した。

- 10月 26日 第 1 回北陸SDGs・ESD推進連絡協議会 （18名出席）
- 1月 25日 第 2 回北陸SDGs・ESD推進連絡協議会 （18名出席）

2. 今年度の成果

今年度は、コロナ禍にあって対面する研修会の開催が難しい状況、授業時数の確保、教員の働き方改革などの影響で、教育委員会等と連携した大規模・中規模の研修会や校内研修会を開催することが、極めて難しい状況であった。そのため、SDGs達成に向けた ESD 授業を実践している北陸のユネスコスクールの実態が正確には把握できなかった。

その中でカリキュラム・マネジメントが危機的状況にありながら、9月以降 SDGs達成に向けた ESD の授業実践を支援できたことが大きかった。勝山市の村岡小学校や勝山南部中学校、あるいは金沢市立花園小学校や富山市立堀川小学校などのように、学校が当初のカリキュラムを破棄し、教育計画を作り直し実施するという過程で、児童生徒の声や意見を取り入れたり、地域住民や協力団体の協力を強化したり、教育内容の再構成、オンライン授業の導入を進めたりと、ポストコロナにも生かせる新たな教育の創意工夫を進めることに寄与できた。

また、11月の勝山市立勝山南部中学校での対面公開研修会やオンラインでの北陸ユネスコスクール交流会やなどでの普及セミナーによって、孤立傾向の学校が交流によって相互に刺激しあい、SDGs達成のために ESD を推進しようとする意気込みを得たようであった。さらに、北陸の29 団体が参加した北陸 ESD 推進連絡協議会を設置し、2回開催され、情報や経験を共有し連携することが出来た。孤立化の傾向の中では、学校等が質の高い教育実践を行いながらも、その実践が SDGs の達成や ESD の視点から見て大きな価値を有していることの認識が弱い、交流会やセミナーによって、SDGs や ESD について理解するだけでなく、自校や自身の教育実践が、SDGs や ESD の視点から見て価値を有していることを具体的に認識し、視点を広げていくことが出来た。SDGs の達成という観点に立った人材育成に有効であり重要であることを示した。今後、オンラインによる研修会や少人数での説明会、指導機会を頻繁に設定することが有効であることが分かった。

主体的に社会的事象の意味を考え、社会認識を深めていく子ども

—第4学年 社会科・総合的な学習の時間「富山型デイサービス」の実践から—

富山市立堀川小学校 教諭 宮前 壯章

はじめに

本校は、教育目標「くらしをみつめ追究する子ども」を掲げ、子どもたちが生きる全てのくらしの中で、自己をみつめ、子ども自身が自らのくらしづくりを行い、個の自立と協働をはかっている。これらはE S Dの考え方と学校の教育経営との相互関係にあると考える。つまり、本校では、子どもが様々な事象や環境を契機に人としての生きる構えを学ぶことを願っており、これらはE S Dの理念と繋がっていると考える。

タイトルの「社会的事象の意味を考える」とは子どもが社会的事象の特色や意味を見直したり、社会的事象に携わる人々の働きを自分の生活との関わりで考えたり、社会的事象がもつ問題や価値を見だし、これからの自分や社会の在り方をみつめたりする姿のことである。「社会的認識を深める」とは、広い視野から多面的・多角的に社会的事象の意味を繰り返し考えたり、表現したりしていくことで、子どもの内に深まる社会生活への理解とともに、自分たちにできることを考えたり、自分も社会の一員として関心をもち続けていくことへの意識を醸成したりするなどの態度が育まれていく姿のことである。本実践では、子どもが主体的に社会的事象に何度も関わって社会的事象の意味を考え、社会認識を深めていく子どもの育成をねらい、学習を行った。

本校では、「ひとり学習」と「集団過程」によって授業を構成している。「ひとり学習」では、例えば本単元「富山型デイサービス」について、自分の着眼点を契機に、自らの問題を見付け、調べることで、対象への見方や考え方を広げ深めていく。「集団過程」では、「ひとり学習」で獲得した知識やそれを基にした考えを互いに聞き合うことで、更に自分の考えを吟味したり、検討したりしていく。本実践では、6月23日に単元と出会った。子どもたちは一人一人が見方・考え方を働かせながら、対象と向き合い、ひとり学習を行っていった。この「ひとり学習」が子どもたちの追究の基盤であり、対象と向き合い続けていく。その中で「集団過程」を設定し、仲間の見方や考え方を契機に、子ども一人一人が自分らしい「ひとり学習」を充実させていくのである。「ひとり学習」と「集団過程」を繰り返しながら、主体的に社会的事象の意味を考え、社会認識を深めていく子どもの姿をAさんの歩みから捉えていく。

Aさんの歩み

(1) 見聞きしたことがある「デイサービス」という言葉が気になり、「富山型」との違いを調べる

学習は、単元名「富山型デイサービス」と併せて、富山型デイサービスの定義である「赤ちゃんからお年寄りまで、障害のある人もない人も、誰もが一緒に身近な地域でデイサービスを受けられる場所」という言葉を子どもたちに投げかけた。

Aさんは、学習が始まると、祖母のことを思い出し、「デイサービス」という言葉から、どのようなことをしている場所なのかが気になり出し、次のように発言した。

単元提示（6月23日）授業記録

- A おばあちゃんが老人ホームに行ってた時に、何かデイサービスってよく聞いてたから、デイサービスって何だろうって思ったから、この学習で調べてみたいなって思った。
- T おばあちゃん、老人ホームに行かれていますのよね。この間でくらしの時間で。
- A 何かいろんなところ行ってるから、最初ら辺の時に、その老人ホームのカレンダーに、デイサービスで何日何々しますって書いてあったから、その時何するのか分かんなかったから、調べてみたいなって。

学習を契機に自分の祖母がデイサービスとどのような関わりをもっていたのかを思い起こし、どのような場所なのか探ろうとしている様子が見える。

Aさんは、授業後のワークシートにも次のように書き、デイサービスについて明らかにしていこうとしている。

6月23日（ワークシート） 活動日が楽しみ！！

私は今日話したのと同じで、前のおばあちゃんの老人ホームでデイサービスの言葉がポスターに書いてあったり、係の人やお母さんも言っていたりしたから、そのときは「デイサービスって何だろう？」と思っていて、今日の話を聞いてこの学習で調べよう！と思うといろいろ調べたいことが浮かんできました。まず最初にデイサービスが何かを調べたいから、活動日がとても楽しみです。

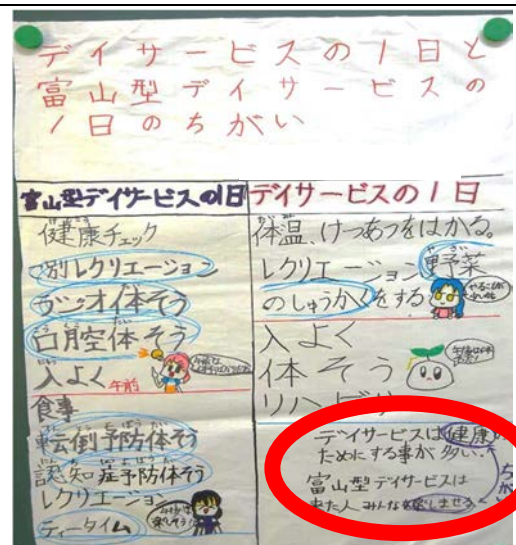
Aさんはすぐに母親に祖母がかつてデイサービスに行っていたこと、今はもうデイサービスには行っておらず、老人ホームに入っていることを教えてもらった。そして、デイサービスは日帰り介護のことであることを調べ、どのような一日を送っているのかを調べてきた。その中でもレクリエーションと言う耳慣れない言葉に出合い、何をすることなのかを調べていく。調べ方の手引きを参考に、国語辞典で言葉の意味を調べ、その後に関連資料を読むことで、より言葉の理解を深め、デイサービスでの一日が具体的にイメージできるようにしようとしていくAさんである。

7月3日（ワークシート） 国語辞典で調べる！

私は6月27日に調べて、まだ分からないことがあって、それは「レクリエーション」の意味が分かっていなくて、休日はそのことを調べようと思いました。何で調べるかというと、国語辞典で調べようと思いました。あと、「デイサービス」も調べたくて、訳は私の知っているデイサービスと違うかもしれないからです。調べるのが楽しみです。

デイサービスとはどのような場所なのか、明らかにしていこうとしていく。そして、分からなかったことが分かってくることに楽しさを感じているAさんであることが分かる。

レクリエーションの内容が分かり、デイサービスの一日の過ごし方が分かってくると、富山型デイサービスの一日を調べていく。二つを比較し、違いを見付けることで、Aさんは「富山型デイサービス」がどのような場所なのかをつかもうとしていく。



＜Aさんが書いた自作資料＞

7月16日（ワークシート） 富山型デイサービスの一日がやっと分かった！

私は今日、富山型デイサービスの1日を調べました。デイサービスの1日と違って、レクリエーションが2回あったり、ティータイムなどがあったりして、普通のデイサービスと違うところがあってびっくりしました。一番最初に気付いたことは、終わる時間で、デイサービスは4時まで、富山型デイサービスが4時または5時と書いてあって、富山型デイサービスとデイサービスはやっていることが違うから、終わる時間も違うのかなと思いました。

1日の過ごし方に差異を見付け、デイサービスと富山型デイサービスを位置付けようとしていく。そして、レクリエーションの回数やティータイム、健康チェックの内容等から、デイサービスを「健康のための施設」、富山型デイサービスを「来た人を楽しませる施設」だと捉え、資料に自分の考えをまとめる。

7月17日（ワークシート） 富山型デイサービスの1日はいいと思うけど、もしかしたら富山型デイサービスでも一つ一つ1日が違うかもしれない！

私は富山型デイサービスの「M」の1日を調べて、調べたかったデイサービスの1日と富山型デイサービスの1日の違いが分かって、「富山型デイサービスの1日っていいな」と思ったけれど、もしかしたら富山型デイサービスでも1つ1つ違う1日かもしれないと思って、今富山型デイサービスを調べていて、今のところ「K」「AF」「F」「J」の四つが分かっていてその四つの富山型デイサービスの1日を調べていきたいです。もし1日が違ったら、富山型デイサービスの約束があって、約束を取り入れてやっていると思う。

来た人を楽しませる施設である富山型デイサービスの1日を「いいな」と思い始めるAさんである。これに満足せず、他の施設も同じような1日を過ごしているのかを調べることで、Aさんは富山型デイサービスが来た人を楽しませる施設なのか、確かにしていこうとする。

(2) 「富山型デイサービス」＝「家」と言う視点から、どのような場所なのかを探る

7月22日に第1回集団過程を行った。最初に発言したのはBさんである。

第1回集団過程（7月22日）授業記録

B だからSMさんが作りたかったものは、安心して亡くなれるっていうか、私はデイサービスとか普通の老人ホームは施設だと思ってて、でも富山型デイサービスは家なんじゃないかな。すごい大きい家族みたいな感じ。SMさんは安心して亡くなれる前に、思い出を作れる場所を作りたかったんじゃないかって、SMさんは第2の家、安心して亡くなれる家を作ったのではないかな。



<発言するBさん>

Aさんは、授業では発言することはなかったが、Bさんの話から富山型デイサービスがどのような場所なのか新たな視点をもつことができた。

7月22日（ワークシート） 富山型デイサービスの約束は家族というようにところにする？

私はBさんの話を聞いて、前までおじいちゃんやおばあちゃんがいる施設だと思ってたけど、SMさんが作りたかったものは施設ではなくて第2の家だったんじゃないかなと思いました。おじいちゃんおばあちゃんは家族というみたいにお話をしたり、遊んだりして家みたいだな思っているんじゃないのかなとも思いました。私は家族というように感じにするとというのがSMさんが考えた富山型デイサービスの大切な約束なのかなと思いました。

Bさんの話から、Aさんは、SMさんが考える本当の富山型デイサービスであるためには、富山型デイサービス特有の約束があり、それを守る必要があるのだと考え始めた。そして、それを利用者が「家族」というみたいにする「家」のよ

うな場所にする다고 考え、その考えを確かめるために調べていく。

以後、夏休みを経て、これまでの取組を振り返ってワークシートを書いた。Aさんは、第1回集団過程でのBさんの話から着想した「富山型デイサービス＝『家』」であるという視点から、どのような場所であるのかを予想し、確かめていくことを決めて歩んでいく。

8月28日（ワークシート） 富山型デイサービスの約束によって、安心して楽しい場所になる

私は、今富山型デイサービスには約束があると思っています。それはどういう約束かというと「家族といるようにする」です。なぜそう思っているかというと、7月22日の聞き合いでBさんが「最初は怖い場所だと思っていたけど、調べていくと富山型デイは楽しい場所だった」と言っていたから、楽しくてお話ができて、楽しい思い出ができる場所は家だと思ったからです。そこで私はその約束には場所と関係していると思いました。わけは住宅地にすると、家が見えて「あ、家にいるみたいだな」と思って、安心して富山型デイサービスをもっと楽しんでもくれると思うからです。だから富山型デイサービスの場所を調べていきたいなと思いました。

「家」は楽しく話ができる場所だと考え、そのために立地を住宅地にすることで、家にいるという安心感を富山型デイサービスは出しているのだとAさんは予想した。そして、いろいろな富山型デイサービスの立地を調べていく。

9月3日に行った第2回集団過程でも次のように発言した。

第2回集団過程（9月3日）授業記録

A 私は、さっき富山型デイサービスの約束があると考えているんだけど、CD君の話を聞いて、家で最期を迎えたいって、私は富山型デイサービスの約束は家にいるみたいにするってことだと思うんだけど、今の話を聞いて、家で最期を迎えたいっていうので、何か、家みたいにすれば、家じゃなくても富山型デイサービスで最期を迎えたいって思う人も、思える人もいるんじゃないかなって思ったから、そういう約束になったのかな。（中略）それで、家族といるみたいにするっていうので……。家で最期を迎えたいって人も、富山型デイサービスを家に似てるなとかって思って、安心してほしいからじゃないかなと思います。

SMさんが富山型デイサービスを作るきっかけとなった患者さんの言葉「家で最期を迎えたい」からも、第2の家として利用者に安心感を与える場所にしようとしている富山型デイサービスなのだろうと、今の自分の予想が正しかったのだと自信を深めていく。

(3) 「富山型デイサービス」の特性を実感を伴って理解し、「家」の捉えが変わる

Aさんが、建物としての「家」を利用者に提供しようとするのが富山型デイサービスなのだという考えを確かにしていった。そんな中、10月23日、この学習が始まって初めて校区内にある富山型デイサービス「A I」を見学する機会を得た。子どもたちは、感染症拡大のために、学習が始まってから一度も実際の富山型デイサービスの現場を見ることができなかった。図書資料や映像資料、身近な人へのインタビュー等で調べてきた子どもたちである。しかし、実際に働く人や利用者の方に会って話を聞きたいと考えた子どもたちが「A I」に電



＜「ありがとうの家」の見学の様子＞

話したところ、「感染症対策ができたから」と快く見学を引き受けてくださったのである。その見学でAさんは、富山型デイサービスが本当に「家」のようなのかを確かめに行く。外観や中の様子を見たり、経営者のSさんに「A I」ができた経緯を質問したりするなど、どのように建てられた建物なのかを明らかにしようとした。しかし、見学後のワークシートには次のように書いた。

10月23日（ワークシート） 富山型デイサービスの利用者の方たちはみんな笑顔だから、私もお年寄りになったら富山型デイサービスに行きたい！

私は今日「A I」を見に行って、利用者の方が第2の家と言っている意味が分かるなと思いました。わけは、「A I」はもともと家で、私のイメージは普通の家だったけど、障害のある・ない、お年寄り、子ども、大人、関係なく誰でも行ける家というイメージに変わりました。利用者の方たちがみんな笑顔で私もお年寄りになったら、富山型デイサービスに行きたいなと思いました。

Aさんは、「A I」が元々あった空き家を改装されて作られたことを経営者のSさんから聞く。予想していた富山型デイサービスは建物として「家」であることを証明できた。実際にこの後に作る自作資料には、「A I」が本当の家から作られたことを書く。しかし、ワークシートのタイトルには、「富山型デイサービスの利用者の方たちはみんな笑顔だから、私もお年寄りになったら富山型デイサービスに行きたい！」と書き、富山型デイサービスのよさを実感した気持ちが書かれている。「建物＝外観」として「家」と捉えていた富山型デイサービスが、そこで暮らす人々のつながりを実感したのである。つまり、内面としての「家」へと認識が変わったのだと考えられる。また、学習が始まった時に教師が行った言葉による説明「赤ちゃんからお年寄りまで、障害のある人もない人も、誰もが一緒に身近な地域でデイサービスを受けられる場所」が、この時初めて実感を伴って理解できたAさんなのである。



＜Aさんが書いた自作資料＞

同時に、Aさんは新たな疑問も生まれてきた。建物としての「家」であることも分かり、集まる人々もつながりをもって暮らしていることが実感できた。では、本当に利用者の人たちは富山型デイサービスのことを「家」と感じているのか、集まる人のことを「家族」と感じているのかということである。まして年齢も性別も違い、障害を抱えている人も様々な人が集まる場所である。10月27日のワークシートには次のように書いている。

10月27日（ワークシート） 誰もが一緒に過ごせる家をつくった惣万さんはすごい！

私は今、富山型デイサービスは普通の家でも施設でもなく、年齢や障害があるない関係なく誰もが一緒に過ごせる家だと思います。なぜなら10月19日に富山型デイサービスとは何か調べた時に、「高齢者や子供、障害のある方を含め、年齢に関係なく誰もが一緒に過ごせる富山県発祥のデイサービス」と書かれていて、利用者さんとの間に違いはないと思ったからです。年齢や障害に関係なく受け入れて富山型デイサービスを作ったSMさんはすごいと思いました。なぜなら「私だったら年齢を関係なくしたら、人との間に違いが生まれそう、障害をあるない関係なくしたら変に絡まれて困ってしまう人もいるかも」と不安になるからです。

改めて、富山型デイサービスの特性である誰でも来てよい場所ということが気になり出し、SMさんが富山型デイサービスを作った経緯を調べたAさんは、働く人がどのような願いをもって「家」のような富山型デイサービスを作り、運営しているのかが気になってくるのである。見学した際に生まれた疑問に加え、利用者も働く人も富山型デイサービスのことを「家」と感じ、集まる人々を「家族」と感じているのかを確かめようとしていく。

それを解決するためには、たくさんの人の声を聞く必要があると考えたAさんは、調べ方の手引きを参考にアンケートを作成し、もう一度「A I」に行くことを自ら進んで計画する。建物としての「家」であることだけではなく、内面としての「家」こそが、富山型デイサービスよさなのではないかと考えるようになってきているのである。

<Aさんが作ったアンケート>

11月12日(ワークシート) 富山型デイサービスをやっている人はどんな願いがあって利用者さんを優先した富山型デイサービスをつくったのか気になる！

私は10月30日に富山型デイサービスは本当に家なのか気になったので、11月1日に「うちら富山型デイサービスやちゃ！」という「K」のホームページで調べました。そしたら、「富山型デイサービスのほとんどが民家を改装して作った普通の家です。大きな病院とは違い畳があり、台所がある自分の住んでいる家と何ら変わらない今まで馴染んでいた環境です」と書かれていたので富山型デイサービスは家だということが分かりました。そして「畳の上で死にたい」と言っていた利用者さんは富山型デイサービスの畳の上でご家族が集まった中で亡くなったということもあったと書いてあって、富山型デイサービスをやっている人はどういう願いがあって、利用者さんを優先した富山型デイサービスを作ったのか気になったので調べていきたいと思いました。

ワークシートからもAさんは、自分の考えである建物としての「家」である富山型デイサービスだという考えに確信をもっていることが分かる。それに留まらず、実際に望んで富山型デイサービスの畳の上で亡くなった人がいることを知り、富山型デイサービスの人々のつながりにある内面としての「家」の在り方が気になり、探っていこうとしているのである。

(4) 「富山型デイサービス」で生きる人々から、人のつながりを実感し、よさを感じる

11月20日、Aさんは「A I」に2回目の見学に行った。その際に利用者である94歳のHさんから「みんなに会えることが一番楽しい。家族といるように感じる」と富山型デイサービスへの思いを聞いたり、経営者のSさんをはじめとする働く方々から「人と触れ合えることが楽しみ」だと聞いたりすることで、富山型デイサービスに集まる人々のつながりを実感するのである。そしてAさんは、富山型デイサービスはいいところだという思いを強めていく。



<Hさんと話すAさん>

11月20日（ワークシート） 富山型デイサービスはとってもいいところ！

私は利用者さんも働く方たちも皆さんと会えることが一番の楽しみだと思っていたことが分かりました。それで私は学校で友達と話すのは当たり前と思っていたけど、とても楽しいことなんだなと思いました。Sさん（経営者）は利用者さんのことを「人生の先輩」と思っていると言っていて、Hさん（利用者）と話して本当に「人生の先輩」だなと思いました。2回目だからだと思うけどやっぱり富山型デイサービスはいいところだなと思いました。

Aさんは、学習が始まってから疑問に思うことに対し、自分なりに予想を立て、調べていくことで、考えを確かにしてきた。その中で「A I」を訪れたことで、実際に富山型デイサービスで働く人や利用する人に出会い、その方々一人一人に富山型デイサービスに対する思いや願いがあることが分かった。言葉として理解していたことが実感を伴って理解することもできた。さらに「A I」での人のつながりを感じて、富山型デイサービスは自分にとっても魅力的な場所になってきたのである。

11月27日、第4回集団過程を行った。最初に発言したのはAさんである。

第4回集団過程（11月27日）授業記録

- T 「A I」に行ったら家族になるよって言ってたよね。Aさんも家族だなんて思った？
- A （頷く）思いました。血のつながりのない家族。
- T 血のつながりのない家族だよね。
- A えー、何て説明すればいいのかな。頭の中では考えられるけど。
- T 頭の中にはあるんだ。
- A ある。何て言うんだろうな。何か、家族みたいな、家族じゃないけど、家族じゃない人と集まるって言うことに対しては何か、何て言うんだろう。さっき言ったように自然と好きなことが言えないんだけど、私が思うに、「A I」はもともと家だから、過ごしてる間に近所の家にいるみたいな感じだから、気軽に話ができるみたいな、そういうところみたいな。

Aさんは富山型デイサービスを「自然と好きなことが言える場所」とし、集まる人々を「血のつながりのない家族」と表現した。そして、Aさんが利用者のHさん（90代）が「A I」に来ている理由を語ったことで、「A I」に関わる人々一人一人について考えていく契機となる。

第4回集団過程（11月27日）授業記録

- T 利用者さんって、みんなと会えたり、自然と好きなことが言えるから来られるんだよね。何でみんなと会いたいなの？
- A Hさん（利用者 90代）たぶん奥さんと夫婦でしか住んでないんだけど、人とたくさん会いたいってそういう感じ。もしかしたらなんだけど、いつもさみしいって感じなのかもしれないって思う。
- T さみしいなって思いを抱えてる人が来れるのかな。
- ・ B 富山型デイに行ったら、自分と同じぐらいの年の人もいっぱいいるし、いろんな年の人もいるから。
- A 老人ホームとかだったら、おじいちゃんおばあちゃんとかしか行けないけど、やっぱり富山型デイサービスは誰でも来ていいですよって。（中略）
- ・ A ちっちゃい子にも会いたい。
- T Yちゃん（利用者 4歳）みたいな子供も来るんだよね。Yちゃんは……、行きたいの？
- ・ A えっ、じゃあどうなんだろう。Yちゃんが行きたいとも言うのかな。
- ・ C 最初から行きたいとは思わない。
- T 最初から行きたいとは思ってなかったんか。

- ・ B お母さんたちが、いろんな人と関わった方がいいだろうって言って、入ってみたら…
- ・ A だから、Yちゃんだけで来ているのかもしれない。(中略)
- ・ B 1回目に行ったときに男の子の中学生と女の子の中学生が一人ずつ来ていた。塗り絵してた。
- C 寝ているおばあちゃんいたね。
- T 寝ている人。
- ・ A ベッドの近くでは静かにしてくださいって……。
- ・ B お昼寝中だったのかな。(中略)
- B 核家族化？お父さん、お母さん、子供、おじいちゃん、おばあちゃん……、1、2、3、4、5人、6人で住んでたのが、お父さんお母さん子供と、おじいちゃんおばあちゃんが別々に住むようになった。
- T 核家族化。そういう人たちは、いろんな人に会いたいの？
- ・ A お世話しきれないから。(中略)
- B 病気の人、Hさん(利用者90代)、奥さんの方、病気もってるらしい。だから、病院に通いながら富山型デイサービスに来ている。だからわざわざ病院の近くに住んでるんだって。それで、近くにありがたい家がある。
- ・ C へー、そうなんだ。

Aさんの発言の後に、BさんやCさんが関わりながら、「A I」に関わる人々を具体的に思い浮かべていく。そして、Hさん(90代)やYちゃん(4歳)等、様々な年齢の利用者たちの願いやその家族の願い、障害を抱える人たちの願い、更には福祉施設を利用せざるを得なくなってきた社会的背景にまで目を向けて、富山型デイサービスの社会における存在意義を考えていった。

以下、子供たちの集団過程後のワークシートである。

Bさん 11月27日(ワークシート)「A I」はみんなが家族になれる場所だから人が来る

私はYちゃんやHさん、中学生、スタッフが家族になれるのが「A I」だと感じました。なぜなら家族みたいにいると自然に話せるし、遊べるからです。「A I」はそれができていると思いました。「A I」は自分でドアを開けて小さな玄関で靴を脱いで、「ただいまー、今日もよろしくー」みたいな感じで入っていけるから、1人2人じゃ寂しいなと思っている人が来るんじゃないかなと思いました。

Cさん 11月27日(ワークシート)スタッフさんは時間が空いている時も考えているかを調べたい

Aさんは「家族」ということを利用者さんだけで考えていたから、何でかなあと思いました。だってSさん(経営者)やスタッフさんとまず話して楽しいと思うから、他の利用者さんとも仲良くなりたいと思うと思うから、利用者さんたちのおかげで「家族」ができたのもあるけどスタッフさんのおかげで「家族」になれたのかなと思いました。スタッフさんが「何を話そうかな」と考えているから利用者さんと話すときは笑顔で話したり自分自身も楽しいのかなと思いました。そしてすごいと思いました。だって時間が空いている時間も利用者さんのことを考えていると思うからです。

D君 11月27日(ワークシート)血のつながりがなくても大丈夫

僕のおばあちゃんは同年代の人と喋るのが好きと言っていました。僕はおばあちゃんが血のつながりが無いのに何で仲良くなれるんだと気になりました。今日の聞き合いでHさんたちとYちゃんが仲よくしておばあちゃんもいろんな人とか仲良くできたのはやっぱりありがたい家や富山型デイサービスだと思いました。やっぱり血のつながりがなくても富山型デイサービスがあればさみしいこともなくなるから富山型は大切だと思いました。

Bさんは、「A I」の利用者を思い浮かべ、一人一人が富山型デイサービスに求めていることから、富山型デイサービスの役割について考えていこうとしている。Bさんは、富山型デイサービスがもつ居心地のよさは、家としての空間とそこに集まる人々の両方から生まれるものだと考えているように思える。Cさんは、血のつながりのない家族を構成する一員としての働く人の役割を考えている。富山型デイサービスのよさは自然に生まれたものではなく、働く人の努力によるものだという思いを強めている。D君は祖母が富山型デイサービスに通っている。自分の祖母が求めているものを通して、利用者が富山型デイサービスに対してどのように感じているのかを探っていこうとしている。Aさんの話を契機に、富山型デイサービスに関わる多様な人々を通して、富山型デイサービスの社会における役割を考え始めている子供たちである。

Aさんは、授業後のワークシートに次のように書いた。

11月27日（ワークシート） 気軽に話せる人とあまり話さない人にとって、1番楽しいことは違うかもしれない

私は聞き合いで、仲良くなれるから自然と好きなことが言えるというのが家族という発見があったのだけど、（中略）もしかしたら中学生の人たちはHさん（利用者90代）や他のおじいちゃんおばあちゃんの願いが違うのかもしれないと考えました。2回目に行ったときはあまり利用者の人たちがいなかったので、比べたりすることができなかったのも、また「A I」に質問をしに行きたいと思いました。なぜなら、Yちゃん（利用者4歳）のように気軽に話せる人、あまり話さない人にはもしかしたら1番楽しいことが違うのかもしれないと思ったからです。

Aさんは、仲間との対話から、「A I」の2回の見学では出会えなかった人たちの願いについて考え始めている。利用者のHさんや経営者のSさんたちの話だけで結論を出すのではなく、富山型デイサービスを利用する多様な人々一人一人の願いに迫ることで、富山型デイサービスとはどのような場所なのかを更に明らかにしようとしていくのである。

12月18日、Aさんは「A I」に3回目の見学に行った。経営者のSさんに利用者同士の関わりについて質問し、お年寄りが子どもたちと関わっている様子を教えてもらった。富山型デイサービスに集まる多様な人々同士のつながり確かめ、様々な願いをもって集まった人が関わり合い、家族のようなつながりをもっているのだと実感するのである。

12月23日（ワークシート） 富山型デイは、笑顔が生まれる場！

私はお年寄りの方たちは誰かと話したりするだけで、とてもうれしい気持ちになると考えています。なぜならHさん（利用者90代）が「話していると、中に混じってくる子もいる」と嬉しそうに言っていたからです。前、気になっていた「中学生の方とお年寄りの方はつながっているのか」は、Sさん（経営者）の話から、「つながっている」ことが分かったので、話しているのを想像すると笑顔で話している様子が思い浮かんだので、富山型デイサービスは笑顔が生まれる場なんだと思いました。

Aさんは、富山型デイサービスを様々な人が様々な願いをもって集まり、それぞれの願いがかなえられる場所として、「笑顔が生まれる場所」と書いた。祖母がお世話になっていた福祉施設と関わりがある場所と捉えていた「富山型デイサービス」の認識を「楽しませる施設」「家のような施設」「人のつながりのある家」「働く人や利用者の多様な願いを叶える場所」と変容させてきた。そして、富山

型デイサービスを魅力的な場所と捉え、「自分が過ごしたい場所」という自分の願いを重ねて見つめるようになったのである。

(5) 「富山型デイサービス」が人のつながりをとというよさを持続しながら、今後も存続し続けられるのかが気なり、現状を確かめていく

冬休みが明け、再び感染症拡大が広がり、富山県も警戒レベルがステージ2へと引き上げられた。人とのつながりが富山型デイサービスのよさだと考えていたAさんは、感染症により富山型デイサービスでも人々の関わりが減り、人のつながりが保てなくなってしまうのではないかと心配になった。そして、富山型デイサービス施設一覧を片手に、片っ端から富山型デイサービスに電話をして行く。感染症の拡大予防のためにできなくなったことはないのか、利用者さん同士はどのように過ごし、互いに関わりをもつことができているのかを確かめていくのである。Aさんは富山型デイサービスが今後もそのよさを保ちつつ存続していくことができるのか、自分の願う富山型デイサービスであり続けてほしいと願い活動を続けている。そのために自分にできることはないのか考え始めている。願いをもって社会と関わる一歩を歩もうとしているのである。



<富山型デイサービスに電話をするAさん>

おわりに

Aさんの歩みを辿りながら、「ひとり学習」と「集団過程」を繰り返しながら、主体的に社会的事象の意味を考え、社会認識を深めていく子どもの姿を捉えてきた。終わりに本実践とSDGsについて触れておきたい。

単元構想時では、本単元「富山型デイサービス」は、3番「全ての人に健康と福祉を」、11番「住み続けられるまちづくりを」との関連性があると考えていた。しかし、学習を進め、子どもたちの歩みを丁寧に捉えていくと、10番「人や国の不平等をなくそう」や17番「パートナーシップで目標を達成しよう」にも関連性があることに気付かされた。また、社会、経済、環境全体を考える必要があることが認識されるようになり、「富山型デイサービス」という素材が、SDGを追究する上で、教材としての優れた可能性をもつことを見いだすことができた。

Aさんの歩みで捉えてきたように、子どもの着眼点を基にその歩みを丁寧に支えていくことで、子どもは自分らしい見方・考え方を働かせながら、主体的に社会的事象の意味を考え、社会認識を深めていくことが分かる。また、子どもの姿を捉えていく過程で「富山型デイサービス」にあるSDGsにおける教材の広がりや可能性を見いだすことができた。今後も子どもが自分らしい見方・考え方を働かせながら学習に取り組んでいけるようなESDに関するカリキュラム開発の可能性を探り、実践していきたい。



<本実践とSDGsとの関連>

「きまっし！花園！」を実践して

金沢市立花園小学校
教頭 坪内 真弓

1. 「きまっし！花園！」について

「きまっし！花園！」は、形を変えたミニ運動会である。今年度はコロナ禍のため、運動会を例年通り実施することが難しい状況があった。金沢市内では、縮小して半日程度でミニ運動会を実施する学校が多かった。

本校でも、下記のように運動会を縮小して実施することにした。しかし、ただ縮小するのではなく、例年とは形も内容も変える等工夫をして行うことにした。

●日 時	: 10月17日(土) 午前のみ
●場 所	: 本校 体育館 及び 運動場

2. 行事を行うことになった経緯

本校が毎年交流している台湾の南台湾和風会から、5月に花園地区に1,000枚のマスクが送られたことに起因する。学校には300枚配付され、児童と職員に一人2枚ずつ配付することができた。昨年2月頃は、新型コロナウイルス感染症が日本でも急速に広まっている時期であり、南台湾和風会がそのことを心配して送ってくれたのだ。3ヶ月もかかったのは、なかなか許可が下りなかったからだときいている。当時日本では、全国的にマスクが不足しており、大変助かった。届いた当初は、6年生が学校を代表して、お礼にメッセージカードを台湾に送ったが、それだけになっていた。



そこで、台湾の方々にきちんとお礼をしたいが、どのような形でお礼をしたらよいかということについて、6年生を中心に考えることにした。その中で、自分たちが頑張っている姿を伝えることが、台湾の方達へのお礼になるのではないかと考え、運動会の様子を配信することにした。

新型コロナウイルス感染拡大を受け、市内の小学校は、どこも縮小して行わざるを得ない状況にあり、本校では運動会自体は縮小して行うものの、形を変えて行うことにした。その中で、運動会そのものを校内に配信することにし、自分の出番以外は各教室で観戦することにした。

3. 「きまっし！花園！」の企画運営

「きまっし！花園！」の企画運営は、6年生を中心に行った。6年生7名が「子ども企画部」として実行委員会を立ち上げ、夏休み前から動き出した。

一方、育友会長の花木さんや児童のダンス指導の柴田さん、校内の配信等では山口さん、花園地区の連合町会長の花木さん、副会長の大島さんらが「大人企画部」として立ち上がり、企画に加わった。



(1) 子ども企画部

子ども企画部は「競技班」「音楽班」「デザイン班」「動画編集班」「若い力班」に分かれてそれぞれの班長になり、6年児童も加わった。

「競技班」は、運動会での団体競技を各学年の6年生との対抗競技に変え、競技やルールを工夫した。

「デザイン班」は、「きまっし！花園！」のポスター作りを提案し、5年生が花木さんの指導を受けて、パソコンで製作した。5年生が思い思いに作成したポスターを、玄関や学校横のフェンスに貼り、行事を盛り上げた。また、「デザイン班」はロゴマークを全校児童から募集し、4年児童が考えたロゴマークに決定した。ロゴマークの原版を教師がデジタル化し、あちこちに掲示した。



「音楽班」は、6年の音楽の単元の「ふしづくり」を活かして、テーマソング「全集中 花園」を作成した。テーマソングは、10月の今月の歌にし、毎日歌った。また、予鈴のメロディーチャイムもこの曲に変えて盛り上げた。



「若い力班」は、6年生の団体演技の「若い力」を先行して練習し、5・6年生に指導した。

このように、児童自らが行事を盛り上げるために、知恵を出し合い、創り上げた。

(2) 大人企画部

育友会長の花木さんは、5年生のポスター作りに関わった。ポスターの特徴や入れる項目だけでなく、デザインの仕方等も指導してくださった。また、当日はドローンを活用してくださり、児童の演技を撮影した映像も配信された。

柴田さんは、低中高学年毎に踊る団体演技の指導をしてくださった。元 EXILE のバックダンサーという経歴をもっているため、人に訴えかけるダンスの仕方のコツを教えてくださいました。

山口さんは、校内に配信するシステムを構築してくださった。まだ、GIGA スクール構想の途中段階にあり、配信工事が進んでいなかった時期のため、山口さんのおかげで他の学校に先駆けて配信することができた。

荒木さんと大島さんは公民館と連携し、花園地区に伝わる地域民謡「花園めぐり」を披露してくださった。地域の方による「花園めぐり」は、プログラムの中程に設定し、地域の方も一緒に行事に参加する形となった。さらに、台湾の方達との窓口となってくださり、台湾との交流コーナーを仕切ってくださいました。

また、「大人企画部」ではないものの、今町にお住まいで花園の歴史や用水の学習でゲストティーチャーとしてご指導して下さる今井さんは、八幡神社に残る獅子頭四体を貸して下さり、図工室に展示した。

「きまっし！花園！」の週には、「子ども企画部」と「大人企画部」が初めて顔合わせをして、この行事についてお互いの動きを共有した。



4. 運動会的要素と文化祭的要素が融合した「きまっし！花園！」

この行事が、単なるミニ運動会ではない理由は、次のようなことにある。

一つ目は、プログラムの中程に「花園めぐり」の披露や「台湾との交流」を入れたことである。

二つ目は、児童がポスターやロゴマーク、テーマソングを製作したことである。これは、普通の運動会にはまったくないことである。また、校舎横のフェンスは花園ロードとして、各学年が製作した掲示物も展示した。低学年は、保護者や地域の方を歓迎する、ロゴマークや校章に自分たちで色を塗った小旗を作った。3年生は、コロナに負けない思いを短冊に書き、それを展示した。4年生は、「花園めぐり」の歌詞を模造紙9枚に絵に表し、掲示した。5年生の作ったポスターも掲示した。



三つ目は、会場を運動会的要素の部分と文化祭的要素の部分に分けたことである。校舎の裏門から敷地内に入り、体育館に向かって右に曲がると花園ロードである。それらの展示物を見ながら歩き、児童玄関を入るとすぐにあるのが図工室。図工室には今町の獅子頭が飾られている。この辺りが文化祭的要素である。

一方で、児童が演技をしたり競技をしたりする体育館や運動場が運動会的要素である。こうすることで、新型コロナウイルス感染拡大防止のために行事が削減される中、保護者や地域の方にも子ども達がコロナに負けずに頑張る様子を伝えることができた。



5. 「きまっし！花園」当日の様子

当日は、低中高学年の団体演技と「花園めぐり」と台湾との交流は、体育館で行い、各学年対6年生との対抗競技と徒競走を運動場で行った。児童は出番の一つ前になると、教室から体育館に移動する。出番には、団体演技であるダンスを披露する。出番が終わったら、運動靴に履き替えて運動場に出て、6年生との対抗競技と徒競走に出る。終わったら教室に戻って、他の学年の出番をテレビ観戦する。「花園めぐり」と「台湾との交流」では、6年生が体育館でお客さんや交流担当として参加した。



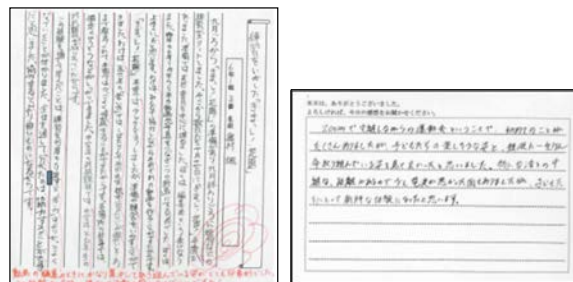
保護者は、体育館では自分の子どもの出番の時だけ参観でき、あとは図書館や音楽室でTV観戦できるように配慮した。運動場でのプログラムについては、特に感染対策を行わず、自由参観とした。

TV観戦は、初の試みだったが、子ども達は楽しそうに画面に見入っていた。

6. 行事後の感想

行事が終わった後に、児童が書いたふり返りや参観した保護者の感想である。

どの子も、達成感や自己有用感、自分の成長を感じたふりかえりを書いていた。保護者の方からは、温かくうれしいお言葉を頂戴した。



7. 今回の企画の成果

今回の企画の成果は、次の3つである。

- ① 6年生を中心に自己有用感を高め、自信を深めることができた。
- ② コロナ禍でも、目には見えない「絆」があること、その「絆」を強く太くすることができることに気づいた。
- ③ 先が予測できない中で、自分たちにできることを考え、実行する力がついた。

また、行事後に国連大学の永井先生や北陸ESDコンソーシアムの池端弘久先生をお招きして、この実践の報告会を行った。永井先生には、「大変よい取組です。全校のみんなを巻き込んで企画した6年生はさすがです。日本での新型コロナウイルス感染拡大を自分事として関心を寄せ、マスクを送ってくれた台湾の人達への感謝の思いを伝える場として、運動会に台湾との交流も盛り込んだのがよい発想です。世界の大きなうねりとなる活動で、国連の目指すSDG'sゴールのお手本になります。」というお話をいただいた。池端先生には「6年生の企画と運営が素晴らしいです。さすがです。これらの経験をこれからもどんどん生かして行ってほしいです。6年生には、今後これらの活動をどのように下級生に託していくのかを考えていてもらいたいです。」というお話をいただいた。



8. 実践を終えて

AIの普及により、10年後には今ある職業の多くがなくなると言われて久しい。これからは先が読めない時代になると言われていた。それが、新型コロナウイルス感染症の世界的な流行により、ある日突然そのときがやってきた。今年度は、新型コロナウイルス感染拡大防止のために4・5月は休業を余儀なくされた。児童の学習はどうなるのか、毎年行われてきた様々な行事はどうなるのか等、児童も保護者も教師も不安になった。これまで誰も経験のしたことのない未知の世界に入ったのだ。

そんな中、この企画が誕生した。コロナにより人とのつながりが絶たれたかのように見られたが、台湾からのマスクが贈られたことにより、絆は変わらないことに気づくことができた。学校を支える地域の方々や多くの学校サポーター、保護者等、子ども達を温かく見守ってくださる方々は、コロナに関係なく協力的なのである。その絆を太く強くしたいと思い、子ども達も教師も地域も頑張ったこの行事を通して、工夫することや挑戦することの楽しさを感じ、達成した喜びを味わい、自信を深めることができたことを考えると、新型コロナウイルス感染症の拡大があったからこそ成長できたのだと思う。ピンチをチャンスに変えたこの行事に関われてよかった。

勝山市のE S D

ージオパークを舞台としたE S Dの取組についてー

勝山市教育委員会 教育総務課
指導主事 安居 幸恵

はじめに

勝山市は、全小中学校がユネスコスクールであり、E S Dに取り組んでいる。その軸足は、「ふるさと学習」と「環境教育」である。ユネスコスクールに加盟する以前から、本市の小中学校においては環境教育がさかんであったが、E S Dという概念に出会ってから、これまで取り組んできた環境教育が様々なものとなつたり、より大きな活動へ広がりを見せている。さらに、社会の動きと連動し学校生活や学びの中にS D G sも定着し始め、S D G sを介して学んだり活動したりする子どもたちの姿も見られる。

学校は、学びに合わせて学校外の団体と連携を取り、活動を進めている。連携先が学校の身近にあるところが勝山市の強みである。その強みの中、子どもたちは、環境教育のみならず、自分が暮らす地域の魅力再発見や課題への気づき、異なる世代の人たちとの交流などE S Dが目指す学びを進めている。

以下、子どもたちの学びの紹介を通して、その学びを支える行政との連携について紹介する。

勝山市について

勝山市は、福井県の北東部の中山間に位置し、県下最大河川九頭竜川の河岸段丘に市街地を形成している人口約2万4千人の自然と歴史豊かな小都市である。小さい市ではあるが、四季折々の風景を楽しむことができる風光明媚な土地柄である。2009年には、アメリカのフォーブス誌電子版で、クリーンなまち世界第9位にランキングされ、市民が勝山を見直す機会となり、また、市民の誇りとなって、今に至っている。

また、恐竜王国福井の中心地でもあり、日本の恐竜化石の大多数を産出している。平成21年10月には、勝山市全体が「恐竜溪谷ふくい勝山ジオパーク」に認定され、勝山市のそれぞれの地域の特色を生かしたジオパーク活動もさかんに行われている。



勝山市の取組について

(1) 勝山市役所との連携について

各小中学校は、地域の外部団体とつながりを持ち、地域の特色を生かした様々な取組を行っている。その中の一つに、市役所との連携がある。以下、連携と取組について紹介する。

①市長部局との連携 「市長と語る会」

平成29年度より毎年1回、市内の中高生が、市長へ各校のESDの取組を報告したり市の取組への提案を行ったりしてきた（令和2年度は感染症防止のため中止）。語る会の出席者は、市長はじめ、提案に関係する各部署の担当者に依頼している。中高生にとっては、自分たちの考えを学校外の人、それも、市政のトップにいる人や政策を実行している人たちに伝えることのできるまたとない機会となっている。さらに、このときに提案されたことや出てきた質問には、各担当課から感想や回答を得ることができ、自分たちの考えたことを客観的に捉え直す機会となっている。参加した生徒の中には、市長の言葉に刺激を受けて、当日の感想のなかに新たな施策を書いてくる生徒がいたり、市長からの質問に答えられず、自分の計画の見通しの甘さを感じたという感想を寄せる生徒がいたり、語る会での交流を通して、より深く考えることが実現できている。



【中学生 市長と語る会】



【勝山高校生 市長と語る会】

<担当課からの回答の一部>

要望・提案 内容	担当課
勝山の発展のために、「中学生ガイド」という活動を提案する。長期休みなどを利用して、中学生が勝山の観光名所のガイドやイベントなどの道案内をするというものである。なぜこの活動を提案するのかというと、恐竜博物館やゆめおれなど、観光客が増えてきているからである。勝山市がより活気ある市へ発展させるため、中学生が役に立てるのではないかと考えた。僕たち勝山南中学校では、1年生の総合の学習の時間で、勝山市について学ぶ。僕は昨年、恐竜博物館やゆめおれなどに行き、勝山市の観光や歴史について学んだ。恐竜博物館では、観光客のみならず喜んでもらうための展示や建物の構造など、様々な工夫を探った。ゆめおれでは組織体験や施設長さんの話を通して、勝山市の産業の奥深さや観光客の秘密について知ることができた。また、今年の1年生も、勝山市の魅力発見のために小原や平泉寺などのジオサイト見学も行った。これらの経験を活かして、具体的な活動内容として、勝山の観光名所である恐竜博物館やまほろばなどのイベントで道案内などをすることなど、僕たちが活躍できる場所や機会がたくさんあると思う。長期休みに希望を取り、行き先を集める。そこではガイドだけでなく、感謝の気持ちを込めて、清掃なども一緒に取り組めるとよいと思うし、三中合同で、また、高校との連携もいいと思う。 ぼくたちは勝山市のよいところをたくさん知っている。だから、それを市外や県外の人たちに発信していきたい。そして、勝山市に観光に来てくださった方に、また来たいと思わせるようにしたい。	商工観光・ふるさと創生課 「勝山市のよいところをたくさん市外や県外の人たちに発信していきたい。」そして、「勝山市に観光に来てくださった方がまた来たい」と思われるようにしたいという考え方、思いは大変素晴らしいと思います。皆さんが勝山市の観光地について勉強したことや知識を活用してガイドを務めることは人気が出るかもしれません。ただし、人に物事を説明することとはかなり難しいことでもあります。単に知識を押しつけるのではなく、いかに相手に興味を持ってもらい、面白く聞いてもらえるかということに力を入れ、ちゃんと筋道を立てて説明できなければなりません。これは繰り返し実践してみないとなかなか慣れていけないことだと思います。実践したいということであれば、どこで誰がやるのか、時期はいつなのか、説明内容など具体的な実行案をつくって取り組みからなければなりません。それには専門家の指導と助言が必要と考えますので、商工観光・ふるさと創生課にご相談ください。
私は、勝山の発展のために、市役所に「C課」をつくることではないかと考えた。「C課」のCは「中学生」のCである。鯖江には「J」K課」というものがあり、商品開発やプログラ更新などを通して、鯖江市のよさを発信している。だから、私たちが、中学生ならでは発想やアイデアを生かして勝山市をより上げたい。「C課」では、商品開発やイベントの企画・運営をすることで、勝山の話題を作り、全国へ発信していきたい。商品開発は、主に食べ物について考えた。若狭野のメロンや勝山市の果物・野菜を使ったメロンズージーはどうだろうか。また、勝山のおききはおいしい。笠松先生はおききが大好きなので、一日一個は必ず食べるそう。このおききも、中のおききを果あんにしたり、柑橘系の風味に変えたりして、様々な種類のものを作っていく。また、平泉寺と東寺のつながりで、三國とも協力し、酒まんじゅうとよもぎというのどうだろうか。そうした商品も、サンパザやコンビニ、2020年にできる道の駅と提携して売り出すことよいのではないかと考える。	商工観光・ふるさと創生課 鯖江市の「J」K課に対抗してC課を作るという発想は面白いと思います。しかしながら中学生だけの課では、中心になる人たちがすぐに卒業してしまい、メンバーの入れ替わりが激しくなると予想されます。できれば中学校から高校までを連結した課なら、携わる生徒も引き続き事業に関わっていくことが可能ではないかと考えます。イベントの企画・運営を実施してみたいとのことですが、ぜひ具体的なアイデアや企画書を市に提案してください。そこから市と中学生とがアイデアを出し合いながら形にしていこうという作業が必要となります。このような実践を繰り返していくことで、C課の具体的な形が見えてくると考えます。
イベントの企画・運営では、中学生が勝山市をより上げられるように、いろいろな企画に挑戦してみたい。例えば、勝山市のクリーンアップ九頭竜。私も実際に参加したことがある。勝山市中で勝山をきれいにする取り組みを、中学生も企画してみたい。また、勝山市の左義長祭りのときも、スタンブラリーなど様々な企画が行われているが、知らない人もたくさんいると思う。「C課」が市役所の方と協力し、アイデアを出し合ってすばらしい活動を企画・運営できるといいと思う。これら「C課」の取り組みは、中学生の声を勝山市の方へ、逆に、勝山市の方から中学生へ、双方向のつながりをさらに強くすると思う。	各中学校に「まちづくりクラブ」（仮称）を作って、その中で練り上げた意見を市長に直接答申し、市長は担当部署と協議して判断するような取り組みも考えられます。
勝山をよりよくしていくために、中学生ができるPRとして、SNSが一番身近にあると感じたため、SNSなどを活用した提案を考えた。 SNSでの発信は、勝山市でもフェイスブックなどを活用して行っていて、イベント開催のお知らせなど様々なものを発信していることを、私たちも知っている。では、私たち中学生が発信していくとよい内容とはどのようなものがあるだろうか。観光地案内や特産品、食べ物についての動画をアップロードするなど様々なある。しかし、私たちは、勝山市外の方にも勝山市内の学生にも勝山市のすばらしさを知ってほしいと思う。そこで、勝山の企業紹介を「プロジェクトC」という名前で行ってほしい。Cとは中学生の頭文字である。中学生が各企業にインタビューをする。それらを、SNSなどを活用して、動画や文章などの形でインターネット上で取り上げていく。中学生が地元企業に興味を持って、市外の人たちにも勝山のよさを伝えられるようにしたい。	商工観光・ふるさと創生課 勝山市をPRする方法としてSNSは必要不可欠だと認識しています。しかし、うまく活用できていないことも事実です。中学生の皆さんからSNSの素材を提出してもらうことはとてもありがたいことですので、誰に何をどのようにPRするかを明確にして、ぜひ素材を作成して見せてください。内容は審査が必要だと思いますが、良いものであれば市のホームページやFacebook等での発信を検討したいと思います。

②史蹟・文化課との連携「未来の語り部」授業のスタート

史蹟・文化課は、市史の編さん、文化財の保護、史跡の保存・活用や埋蔵文化財の発掘、研究、国史跡白山平泉寺旧境内の総合整備、文化芸術振興を担当している。以前から、白山平泉寺や七里壁などの街歩き、村岡山登山等ふるさと学習のゲストティーチャーとして学校教育に携わってきた。

2019年に白山平泉寺旧境内や一乗谷朝倉氏遺跡などが「石のまちづくり」をテーマとする日本遺産に認定されたことをきっかけに、平泉寺小学校は一乗谷朝倉氏遺跡を校区に持つ福井市一乗小学校との交流を行った。そこで、平泉寺小学校と積極的に関わりを持ち、平泉寺の魅力をPRする観光ガイド育成を通じて、子どもたちがふるさとの魅力を知ること、その魅力を伝えることができるようになることを目的に、未来の語り部育成を実施した。その取組は以下のとおりである。

6月17日 事前学習1 現地にて



7月22日 事前学習2

平泉寺小学校にて



9月23日

事前学習3

ガイドリハーサル（平泉寺小学校にて）

10月23日

事前学習4

ガイドリハーサル（現地にて）

DP/23
初めて、市役所の方へがけをしました。とても、平泉寺は良い所なので、その魅力を伝えるためにがんばってがけを行いました。もっと平泉寺の魅力を伝えたいと思いました。

②月
雨の中でのリハーサルだったけど市の方からいただいたアドバイスを生かして上手く説明することができて良かったです。北海道からいらした方々にも伝えることが出来て良かったです。



11月18日 一乗小学校を迎えて、未来の語り部大会



③ジオパークまちづくり課との連携

ジオパークまちづくり課は、ジオパーク及びユネスコエコパークの推進、エコミュージアム構想、ふるさとルネッサンス事業、各地区の地域力向上プロジェクト、雪氷熱エネルギーに関すること、外来種駆除業務を担当している課である。

学校教育に関しては、「ジオパーク学習」と位置づけ、年度初めの校長会にて広報活動を行い、積極的な活用を呼びかけている。

＜校長会資料＞

令和2年度4月校長会資料

令和2年度ジオパーク学習のお願いについて

勝山ジオパークまちづくり課

1 目的

勝山ジオパークは、勝山のジオパークを多様な地域活動の場として、それらと関連する豊かな自然、歴史、文化を伝える場として、子供たちに学びの場を提供することにより、身近にある自然環境に対する関心を促し、関心する機会を創出することで、子供たちの豊かな感性を育て、文化と自然の調和を促し、結果的に、子供たちが自然環境の自然や文化・歴史の理解を深め、自然環境の保全に貢献するものと考えています。

2 実施内容

- ・ジオパークのフィールドを活用した野外学習および授業の内容や所要時間に応じて、コースの設定・コーディネート（地理学にとらわれないものでなく、地域の自然、歴史、文化とそれらのつながりを感じられるものになるように実施しています）
- ・ジオパーク専門員（理学博士）による現地や教室での解説、説明、案内
- ・ジオパーク野外学習用のバスの便など（バスの便と学習には限りがあります）

3 令和2年度実績

【ジオパーク関連の授業・野外学習・学校行事】

この年度は、なるべく早い段階でご連絡をください。授業の妨げにならないよう、調整は行なっております（例年と野学を組み合わせたコースをお考えの場合は特に）。

小学校名	学年	活用場	実施年月日	学習内容	備考
勝山南	5年	野外学習	6月22日・9月17日・9月24日・10月2日	地学、自然観察（勝山ジオパーク、勝山、勝山、勝山）	○
成器西	3年	大勝山の自然	9月27日・10月1日・10月8日	地学、大勝山の自然（大勝山の自然、大勝山の自然）	○
勝山南	5・6年	大勝山の自然	10月3日・10月10日・10月17日	地学、大勝山の自然（大勝山の自然、大勝山の自然）	○
成器西	3・6年	大勝山の自然	10月17日・10月24日・10月31日	地学、大勝山の自然（大勝山の自然、大勝山の自然）	○
成器西	6年	大勝山の自然	11月12日・11月19日・11月26日	地学、大勝山の自然（大勝山の自然、大勝山の自然）	○
勝山南	6年	大勝山の自然	11月15日・11月22日・11月29日	地学、大勝山の自然（大勝山の自然、大勝山の自然）	○
村岡	5年	大勝山の自然	11月19日・11月26日・12月3日	地学、大勝山の自然（大勝山の自然、大勝山の自然）	○
三井	5・6年	大勝山の自然	11月26日・12月3日・12月10日	地学、大勝山の自然（大勝山の自然、大勝山の自然）	○

小学校名	学年	活用場	実施年月日	学習内容	備考
勝山南	1年	大勝山の自然	5月14日・5月21日・5月28日	地学、大勝山の自然（大勝山の自然、大勝山の自然）	○
勝山南	2年	大勝山の自然	6月5日・6月12日・6月19日	地学、大勝山の自然（大勝山の自然、大勝山の自然）	○

【火山教室】勝山大学教育学部地学教室の三好賢司准教授による、火山について学ぶ、岩石を調べる、マフマを作る、それを流す実験と授業

小学校名	学年	活用場	実施年月日	学習内容	備考
村岡	5・6年	火山教室	10月4日・10月11日・10月18日	火山教室（火山教室、火山教室）	○

【防災教室】H29、30、R1年度は実施なし

小学校名	学年	活用場	実施年月日	学習内容	備考
成器西	5年	防災教室	10月27日・11月3日・11月10日	防災教室（防災教室、防災教室）	○
三井	5年	防災教室	11月3日・11月10日・11月17日	防災教室（防災教室、防災教室）	○
成器西	4、5年	防災教室	11月17日・11月24日・12月1日	防災教室（防災教室、防災教室）	○

●活動の様子



勝山南小学校5年生野外学習（R1年度：勝山南小学校5年生野外学習、勝山南小学校5年生野外学習）

勝山南小学校5年生野外学習（R1年度：勝山南小学校5年生野外学習、勝山南小学校5年生野外学習）

勝山南小学校5年生野外学習（R1年度：勝山南小学校5年生野外学習、勝山南小学校5年生野外学習）

勝山南小学校5年生野外学習（R1年度：勝山南小学校5年生野外学習、勝山南小学校5年生野外学習）

課内の組織が構築されたこと、専門員が配置されたこと等により、この取組が始められた頃に比べ、事前連絡等の連携において、たいへん取り組みやすくなってきた。実施内容についても洗練されてきており、しっかりしたプログラムができあがっている。そのプログラムに学校の要望も加え、授業やPTA行事等で、座学を行ったり現地に赴いて見学や体験をしたり、ジオパークにふれ、知る活動を支援している。本年度は、コロナ禍であったため、多少回数が少なかったものの、下記の表のような活動が行われてきた。

実施年月日	内容	場所	内容
200612	成器西小学校（5年）ジオパーク学習	成器西小学校	勝山の自然環境の土台（大地）
200617	成器西小学校（5年）ジオパーク学習	成器西小学校	勝山の自然環境の土台（大地）その②
200619	勝山南部中学校（1年）ジオパーク学習	勝山南部中学校	ジオパークの取り組み
200624	村岡小学校（3年）ジオパーク学習	村岡小学校	村岡山の成り立ち
200626	成器西小学校（5年）ジオパーク学習	成器西小学校	福井の動植物
200709	村岡小学校（3年）ジオパーク学習	村岡小学校	村岡山の成り立ち
200710	成器西小学校（5年）ジオパーク学習	成器西小学校	勝山の水
200715	成器西小学校（5年）ジオパーク学習	成器西小学校	川の生き物調べをする意味
200715	成器南小学校（5年）ジオパーク学習	雪室	雪室の仕組みと取り組み
200728	勝山南部中学校（1年）ジオパーク学習	勝山南部中学校	地域おこし協力隊から見た勝山
200729	勝山中部中学校（2年）ジオパーク学習	雪室	雪室の仕組みと取り組み
200804	成器西小学校（5年）ジオパーク学習	浄土寺川	浄土寺川の生き物調べ
200915	成器南小学校（3年）ジオパーク学習	成器南小学校	自然観察のコツ
200930	勝山南部中学校（2年）ジオパーク学習	勝山南部中学校	SDGsを意識したビジネス提案
201009	村岡小学校（3年）ジオパーク学習	村岡山	村岡山の成り立ち
201013	成器西小学校（5年）ジオパーク学習	まちなか	水と暮らし
201015	平泉寺小学校（3-6年）ジオパーク学習	平泉寺町内	平泉寺町にまつわる民話とジオ
201020	成器西小学校（5年）ジオパーク学習	九頭竜川ほか	流れる水のはたらきと環境保全
201104	成器西小学校（6年）ジオパーク学習	発掘現場ほか	大地の成り立ち
201110	勝山南部中学校（1年）ジオパーク学習	福井県立恐竜博物館ほか	地域学習
201111	村岡小学校（5年）ジオパーク学習	滝波川ほか	流れる水のはたらき

また、地域ごとに特徴を生かした市民レベルで展開されているジオパーク関連の活動についても支援している。下記のパンフレットはその一例である。この「地域」が小学校区と重なっており、学校の活動にたいへん協力的である。



④教育総務課教育指導係との連携

教育総務課教育指導係は、公立小学校、中学校、幼稚園の教職員研修、学校事務にかかる総括的な事務、各学校から寄せられる相談の窓口、学校教育全般にかかる指導助言を担当している係である。E S D担当者連絡協議会や研修会を開催するなど、学校教育におけるE S Dの推進を支援している。

また、行政や企業がSDG sに関わる活動を進めている中、令和元年度より本格的にSDG sを意識した取り組みを投げかけてきた。令和元年度には、学校教育活動とSDG sを結び付けることを提案し、令和2年度はSDG s関連表の作成を行った。また、授業においてもSDG sを意識することを目指した。SDG sのターゲットマークを加えたE S Dカレンダーや指導案、SDG sを活用した生徒会活動が見られるようになった。

<SDG s 関連表の例>

【SDGsと本校実践との関わり】(中学1年)																
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17
ゴール 貧困をなくそう	飢餓をゼロに	全ての人に健康と福祉を	質の高い教育をみんなに	ジェンダー平等を実現しよう	安全な水とトイレを世界中に	エネルギーをみんなに、そしてクリーンに	働きがいも経済成長も	産業と経済成長のエンジンを弾けよう	人や国の不平等をなくそう	住み続けられるまちづくりを	つくる責任つかう責任	気候変動に具体的な対策を	海の豊かさを守ろう	陸の豊かさを守ろう	平和と公正をすべての人に	パートナーシップで目標を達成しよう
ロゴ	1 貧困をなくそう	2 飢餓をゼロに	3 全ての人に健康と福祉を	4 質の高い教育をみんなに	5 ジェンダー平等を実現しよう	6 安全な水とトイレを世界中に	7 エネルギーをみんなに、そしてクリーンに	8 働きがいも経済成長も	9 産業と経済成長のエンジンを弾けよう	10 人や国の不平等をなくそう	11 住み続けられるまちづくりを	12 つくる責任つかう責任	13 気候変動に具体的な対策を	14 海の豊かさを守ろう	15 陸の豊かさを守ろう	17 パートナーシップで目標を達成しよう
国語	書になれなかった書たち	書になれなかった書たち	デザインは大きな力	言葉の玉の雫、空に生ける言葉	肉の魚は生きていた	肉の魚は生きていた				書を見上げて、シカの「落し書」			肉の魚は生きていた	シカの「落し書」	空を見上げて	
社会	アメリカ州(北) 南アメリカ州(南)	アメリカ州(北)	アメリカ州(北)	アメリカ州(北)	アメリカ州(北)	アメリカ州(北)	アジア州(北)	アジア州(北)	南米時代の暮らし	江戸幕府の成立		アメリカ州(北) 南アメリカ州(南)		アメリカ州(北) 南アメリカ州(南)	アメリカ州(北) 北アメリカ州(北)	アジア州(北) 北アメリカ州(北) 南米時代の暮らし
数学				正の数・負の数の利用	正の数・負の数の利用	正の数・負の数の利用	正の数・負の数の利用	資料の活用	資料の活用	資料の活用	平面図形				資料の活用	平面図形
理科	植物の世界	植物の世界	植物の世界	植物の世界	植物の世界	植物の世界	植物の世界	植物の世界	植物の世界	植物の世界	植物の世界	植物の世界	植物の世界	植物の世界	植物の世界	植物の世界
英語	Unit2 ブラジルから来たサッカー選手	Unit4 ホームパーティー	Unit5 学校の文化祭	Unit8 イギリスの本	Unit2 学校で		Unit9 オーストラリアの文化	Unit10 ここが私のホーム		Unit11 私の1年			Unit6 オーストラリアの文化			Unit1 はじめまして Unit3 私の好きなこと
保健		心身の発達と心の健康	心身の発達と心の健康	心身の発達と心の健康	心身の発達と心の健康											
音楽								アジアの音楽	日本の民謡	Mr. Melody	夢			夢と希望		合唱コンクール
美術	見て楽しむ	形を先ごころに	人のしぐさを捉える	享ててあらわす	気持ちをつかむ	気持ちをつかむ	気持ちをつかむ	気持ちをつかむ	気持ちをつかむ	気持ちをつかむ	生活の中の美	自然とともにある日本の美	文様飾りの小宇宙	文様飾りの小宇宙	心安らぐ私の風景	絵文字がしゃべり出す
技術家庭	健康と食生活	健康と食生活	健康と食生活	健康と食生活	健康と食生活	健康と食生活	健康と食生活	健康と食生活	健康と食生活	健康と食生活	健康と食生活	健康と食生活	健康と食生活	健康と食生活	健康と食生活	健康と食生活
道徳	あふれる愛	あふれる愛	あふれる愛	あふれる愛	あふれる愛	あふれる愛	あふれる愛	あふれる愛	あふれる愛	あふれる愛	あふれる愛	あふれる愛	あふれる愛	あふれる愛	あふれる愛	あふれる愛

(2) 具体的な取組

① ジオパークまちづくり課によるジオパーク学習

村岡小学校 5 年理科「川の流れと水のはたらき」

講 師：町 澄秋（勝山市役所ジオパークまちづくり課 学芸員）

日 時：11月11日(水) 13:40～15:30

参加者：北陸 ESD 推進コンソーシアム、福井大学教職大学院から 4 名

○活動の目的

5 年生「流れる水のはたらき」の学習について、現地へ行って確認するとともに、6 年生「大地のつくり」の地層について先行的に学ぶ。また、地球科学についての専門家からさらに興味深い新たな知見を得て、人間と自然との関わりについて理解を深める。

○当日の様子

現地に到着し、まず、杉山橋の上から滝波川の様子を観察した。川の流れが速いところや遅いところをワークシートにスケッチした。大雨などを繰り返すことで数年かけて川の流れが変わったことを聞き、興味深そうであった。次に、滝波川へ降り、石の観察をした。いろいろな種類の石があるという説明を受けた後、説明にあった石を探した。時のたつのを忘れて石を探している姿が印象的で、知的好奇心を刺激された姿であると感じた。

薬師神谷周辺の滝波川に移動した。杉山橋より多少下流であり、川の様子が変わったこと、また、村の方を見ると、河岸段丘になっていることが観察できた。河岸段丘を利用し住宅地や農作地をつくり人々が暮らしてきた話を聞き、普段見慣れている風景生活ではあるけれど、地形と人々の暮らしが密接に結びついていることを学ぶことができた。

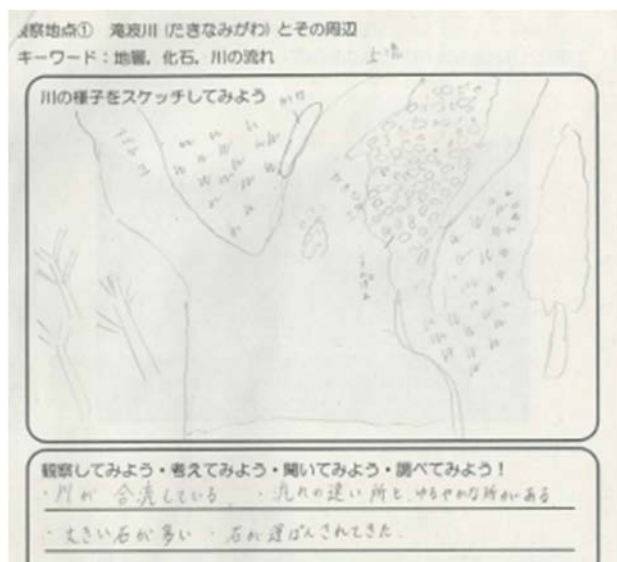
薬師神谷の神社に移動した。この神社は、市の天然記念物に指定されている大銀杏でよく知られている。河岸段丘を感じながら境内に上がった。さらに神社の奥に進むと地層を確認できる場所があった。

以上の一連の学びを通して、5 年生の学習である水の流れのはたらきによって現在の地形ができたことを確認し、さらに、6 年生で学ぶ地層について知ることによって先行経験ができ、本年度の学びを来年度の学びへと系統性を持つことができた。

○活動を終えて

自分たちが暮らしている場所と川にどのような関係があるのか、教室で学ぶことに加えて、現地で確認することで学びが深まった。専門家によって見学する場所が選定され大地の見方の助言を得ることにより、子どもたちの大地の見え方が変わってくる。大地そのものを見ることに加え、川との関係、人々の暮らしや食、文化を関連付けて考える子どもたちの育成につながることを期待できる。すべてが影響を及ぼし合いながら存在し、自分もその中的一部分であることを肌で感じることでできる時間であった。





＜杉山橋上からスケッチした川の様子＞



＜町学芸員による説明＞

②SDG s を活用した授業研究

勝山南部中学校3年社会科「地方自治と私たち「3 地方財政の仕組みと課題」」
日 時：11月19日(木)13:30～16:30
参加者：北陸 ESD 推進コンソーシアム、福井大学教職大学院、勝山市教育委員会、
勝山市役所から14名

SDG s を授業で扱う取組は、令和元年度から始めている。令和元年度は、勝山市 ESD 担当者研修会において、勝山中部中学校での実践を基に、北陸 ESD 推進コンソーシアムより池端弘久先生をお招きし、授業の事後検討会を開催した。令和2年度はさらに、公開授業、授業研究会に北陸 ESD コンソーシアムから多くの先生方にお越しいただいた。

今回の授業で、SDG s を活用する目的として、次のように述べている。

SDG s は、各ターゲットの内容が短い言葉とピクトグラムで表現されているため、勝山市の施策をSDG s に置き換えることで、内容を具体的にイメージしやすくなる。また、文章を読み取るのが苦手な生徒にとって、勝山市総合計画をそのまま読んで内容を十分に把握するのは難しいが、SDG s に置き換えることで勝山市が考える施策を大まかに掴むことができる。SDG s を効果的に取り入れることでイメージを共有しやすくし、全員が学習に参加できるようにしたい。

勝山南部中学校では、SDG s について、社会科だけでなく総合的な学習の時間や技術・家庭科、月に数回のNIEの活動で継続して学習しており、8割程度の生徒はSDG s の基本的考え方やいくつかのターゲットを理解している。

今回の授業では、地方財政が抱える課題を切り口に、勝山市の将来的な持続・発展のために必要な要素をSDG s のターゲットで示した。勝山市という一地域の問題が世界共通の課題であるという普遍的な価値に気付かせ、より広がりを持った学びにつなげたいという思いがあり、市の施策をイメージしやすくするため、「勝山市総合計画」の6つの視点を、それぞれSDG s のターゲットに対応させて示したところから授業が始まった。さらに、「地方税」「国庫支出金」「地方交付税交付金」「地方債」の用語と意味、勝山市の財政資料をもとに作成したグラフを使い、地方財政の歳入の内訳を把握し、自主財源・依存財源と人口の関連性を考えた。そして、次の主発問について、活動が進んだ。



これからの勝山市にとって一番重要な SDGs のターゲットを考えよう。



【ひとりひとりが考えを持つ】



【グループの中で考えを共有する】



【各グループの考えを共有する】



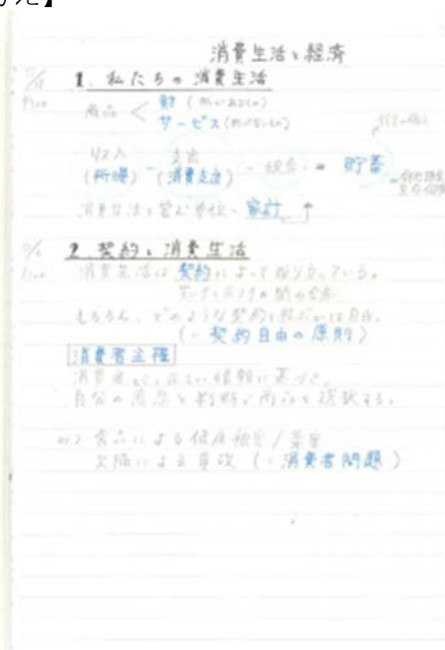
【教師によるまとめ】



【各班ごとの考え】



【本時のノート】



授業後、研究主任と授業者に向けて、SDGs に特化した内容について、参観いただいた先生方との研究会を行った。SDGs を活用し、考えを共有しまとめ上げていく姿が素晴らしいという感想をいただいた。さらに、生徒たちが話をしている中で、自然と、「すべてが関連してつながっていくんだな」ということに気付けたことにSDGs を活用する可能性を確認した。

しかし、社会科の目標として設定されていた「地方財政の仕組みと課題を知ること」については達成に課題が残ることが指摘された。SDGs の可能性を生かすこと、教科の目標を達成すること、両方を実現するには、今後もさらなる教材研究が必要である。

参観いただいた先生方には、最後に、全体研究会においてグループ討議に加わっていただいた。若い先生方へSDGs 以外のことについてもご示唆いただく貴重な時間となった。



終わりに

これは、数年来実施している意識調査の結果である。小学3年生から中学3年生の児童生徒に調査を始めた平成30年と令和2年度を比較している。

地域についての意識調査 ＜2学期末調査＞ 肯定的回答「そう思う」「どちらかというと思う」の回答率	質問内容	No	1	2	3	4	5	6
			あなたが、あなたの今住んでいる地域が好きですか。	あなたが、あなたの今住んでいる地域に誇（ほこ）れるものがあるか。	あなたが、あなたの今住んでいる地域に誇（ほこ）れるものがあるか。	あなたが、あなたの今住んでいる地域に誇（ほこ）れるものがあるか。	あなたが、あなたの今住んでいる地域に誇（ほこ）れるものがあるか。	あなたが、あなたの今住んでいる地域に誇（ほこ）れるものがあるか。
平成30年度 (2018)	市全体		87.8	84.3	78.3	49.6	80.7	61.0
	小学校		92.6	93.2	84.2	63.4	87.8	68.1
	中学校		83.1	75.5	72.6	36.1	73.7	53.9
令和2年度 (2020)	市全体		92.2	88.8	79.2	50.6	84.2	66.3
	小学校		94.0	89.9	84.8	60.0	87.6	75.9
	中学校		89.9	88.7	72.2	38.9	79.9	54.3

中学生の結果は、活動の継続の結果といえることからたいへん注目している。ほぼすべての項目において肯定的回答率の上昇という結果を得ることができた。中でも、「今住んでいる地域に誇（ほこ）れるものがあるか」についての伸びが大きい。継続的に地域についての学び進めてきた結果であり、地域を知ることによって、前述の勝山市を題材とした教科学習が成り立つと考える。

E S Dに取り組み始めたころは、E S Dの取組自体の持続可能性が課題であり、ユネスコスクールへの加盟や市長部局をはじめとする諸団体との連携のもと取組んできた結果、持続可能性を保障するプログラムや組織作りが実現できていることを感じる。今後も学校との連携や適切な評価をする機会を設けること等、学校教育活動の充実のために学校を支援する勝山市でありたい。



本ガイドブックは、独立行政法人環境再生保全機構地球環境基金の助成を受けて製作したものです。

